

平等な世界

小学校五年

ぼくの親せきには、「ダウン症」という障がいがある人がいます。ダウン症と言う病気は、体や脳の発達が遅れたり、それが原因で体の成長が遅くなったり、筋肉の使い方が上手にできなかったりしてしまうことがある病気です。ぼくは小学校一年生になるまでは家族みんなですしよに過ごしていました。ぼくが小さいころにはお母さんみたいにだっこしてくれてよく遊んでくれました。しかし、じょじょに病気が悪化して、し設に入ることになってしまいました。

病気のちりょうのために、ぼくの家族もいっしょに月一回通っている病院に付いていくことがあります。あるとき病院に来ていた他の小さい子どもが、「あの人なんか変。」と言いました。すると周りの人も親せきのおばさんを見つめて、心の中で何か言っているように思いました。ぼくは、「なんで周りの人が見てくるのだろう。」と疑問に思いました。そのときいっしょにいたぼくは、じろじろ見られて何もし

ていないのにいやな気持ちになりました。そして家に帰って、なんで見つめてきていたのか考えました。みんなと変わらないので、同じように接してくれると気持ちよく誰もが過ごせるなと思いました。

テレビでは周りの人が言ったことや悪気なくしてしまった行動がきっかけで自殺をしてしまった人というのを知りました。それは子ども同士で起きたと言うことも耳にしました。それを聞いたぼくは、「差別をするのはだめなことだ。」と改めて思いました。そして、相手を傷つけようと思っていなくても言ってしまったたり、やってしまったりした行動が原因で相手にいやな思いをさせてしまうことがあると分かりました。

だからぼくは、これから障がいのある人に対して、ぼくが思ったようないやな行動は絶対にしたくないし、相手の気持ちを理解して手助けをしていきたいと思いました。そして、障がいがあるなしに関わらず、だれに対しても平等に接することや気持ちよく関わって助け合っていくことが大切だと思いました。